

2018 年 4 月定例自然観察会実施報告書

2018 年 4 月 18 日

6 班 中島和樹

I 概 要

- ◎ 日 時：2018 年 4 月 14 日（土）9:30～15:00
- ◎ テーマ：春色に染まる夙川上流を訪ねる
- ◎ コース：阪急苦楽園口駅～夙川河川敷～銀水橋～水別谷～北山ダム～北山池～銀水橋（越木岩神社北バス停）
- ◎ 参加者：ビジター30名＋会員31名＝61名（会員の内、6班員16名）
参考：自主研修会（4月7日）参加会員数42名（内6班員18名）
- ◎ 配布資料：観察会ルートマップ及び植物リスト
- ◎ 説明リーダー：松本、吉野、安岡、山田、東條

先月末から急速に暖くなり、心配された天候にも恵まれて、4月の定例観察会を予定どおりに実施することができた。

本格的な春を迎えて植物の成長は著しく、1週間前の自主観察会時にはなかった花が咲いていたり、咲いていたはずの花がなくなっていたりして、説明担当のグループリーダーが戸惑う場面もあった。植物の生命力の強さをあらためて感じさせられた。

集合場所である阪急苦楽園口駅東側の夙川河川敷は、桜の宴が終わって静けさを取り戻していた。電車だけでなく、夙川遊歩道を三々五々歩いてくる人もあり、ビジター30名、会員31名の参加者が集まった。

午前9時30分、東條班長の挨拶とコース説明のあと、入念な体操をおこない、5つの班に分かれて出発した。



II 観察記録

◎阪急苦楽園口駅を出発

最初に出会った樹木は、集合場所の階段横にあるナギイカダである。葉のように見える葉状枝の上に小さな白い花を咲かせていた。道路へ上がり、橋を渡る時には、すぐ横で真っ赤に色づいたアカメガシワの新葉が目を惹いた(*1)。

◎夙川河川敷を歩く

再び夙川河川敷に下りた橋のたもとには、オオイタビがある。イチジクの仲間で、茎を切ると白色の乳液が出る。ここから夙川を上流へと歩くが、最初は大きな木が目につく。アカマツには、マツグミが半寄生(寄生しながら自らも光合成)していた(*2)。

ナワシログミの実は赤く色づいて、間もなく食べ頃である。また、鮮やかな八重桜が咲いていて、参加者の注目を集めた。

阪急の高架をくぐるとぐっと視界が開けて、甲山方面を目指して歩く。コデマリは白い花をつけ、アカマツには新芽、アベマキにも若葉が出て、それぞれに春の装いを整えつつあった。

◎石垣の植物

目を右側の石垣に転じると、マツバウンラン、ナガミヒナゲシ、ヒメツルソバなどの小さくて可憐な花が咲いていた。

◎河原の植物

川の流れの一角で、温泉が湧き出ているところがある。これは、かつて賑わった苦楽園温泉の名残である。この付近には、オランダガラシ(クレソン)、オオカワヂシャなどがある。オオカワヂシャは繁殖力が強く、特定外来生物に指定されている(*3)。

再び石垣のツルドクダミを見たあと階段を上がり、川を見下ろす遊歩道を進むと、エノキの花が咲いていた。車道へ出て、シャガ、アケビ、ホソバヒイラギナンテンなどを見ながら、予定どおり10時30分頃、登山道入り口の銀水橋に到着した。

◎銀水橋から登山道を登る

銀水橋で休憩したあと登山道に入ると、ムクノキ、カナメモチ、アオキ、ヒサカキ、ヤブニッケイなどのお馴染みの樹木があるが、いずれも新芽や蕾をつけて春の装いを凝らしている。足元には、キランソウなどの花も咲いており、観察に忙しくなった。



◎登山道から水別谷へ

今回のコースの目玉は、コバノミツバツツジとザイフリボク、ヒメユズリハなどであるが、それらが繰り返し現れることも特徴である。登山道でそれらを観察したあと、急な階段を水別谷へ下ると、カラハンノキやイヌエンジュなど、水辺の植物に出会うことができた。

◎甲陽園目神山町

アップダウンの多い登山道から住宅地の道路に出たあとは、北山貯水池までは住宅地の中を歩く。六甲山の山裾には斜面を這い上がるように開発された住宅団地が多い。また、その町名にもそれぞれの由来がある(*4)。

川沿いの道路を歩きながら、ナナカマド、イヌツゲ、エゴノキ、ウリカエデ、イロハモミジ、アカメヤナギなどの樹木を観察した。沿道の庭にもいろいろな植物があったが、こちらは個人の住宅なので、迷惑にならないよう配慮しながら通過した。

◎北山貯水池

予定どおり 12 時過ぎには北山貯水池へ到着し、予想外の好天の元で昼食休憩を取ることができた。北山貯水池周辺では、クロキ、クロバイ、トウカエデ、マンサク、シキミなどを観察した。また、目前に見える甲山の安山岩について、地質に詳しい会員から説明があった。北山公園への登山道入り口では、一房だけ花をつけたウワミズザクラとリョウブを観察した(*5)。

◎北山池方面へ

帰路の北山池方面への登山道は急な坂道が続き、観察よりも歩くことに気を取られがちだったが、今回の目玉である満開のザイフリボク(シデザクラ)を楽しむことができた(*6)。また、コバノミツバツツジのトンネルをくぐり、コウヤボウキの2年枝、ウラジロの芽立ちなど、この時期にしかない植物を観察することができた。また、常緑樹に寄生するヒノキバヤドリギにも出会うことができた(*2)。

道中では、大阪城再築のために岩石を切り出した「大阪城石垣石 丁場跡」を見学した(*7)。

◎北山池と桜園

最後の桜園にはいろいろな桜の木があったが既に葉桜になっていた。また、桜園の奥では、ユズリハも見つけることができた。

予定の 15 時前にゴールの銀水橋へ到着した時にはポツポツと雨が降り出したが、参加された皆様方には十分楽しんでいただける観察会になったと思う。

【主な見どころ】

(* 1) ナギイカダとアカメガシワ



ナギイカダは、葉のように見える葉状枝の上に小さな白い花を咲かせる。アカメガシワは、ハツとするような真っ赤な新芽をつける。いずれも観察できるのは僅かな期間である。

(* 2) マツグミとヒノキバヤドリギ



宿り木が2種類あった。

宿り木は、ふつう落葉樹に寄生するが、マツグミはマツ、ヒノキバヤドリギはヒサカキに寄生している。

(* 3) 夙川の温泉とオオカワヂシャ



兵庫県知事の服部一三が六甲山脈にラジウム泉があると予期し、大正2年(1913)に技師を派遣し調査させたところ、天狗嶽といわれる地点で泉源を発見。ここから管を引いて共同浴場を開設した。そして大正3年(1914)に苦楽園は山開きを行った。

苦楽園の開発の父と言われた実業家、中村伊三郎が幅広い人脈を持っていたため、財界人から華族までの富裕層が土地を購入し、別荘を建てた。大隈重信や犬養毅夫人も苦楽園へ足を運んだが、その当時の写真を見ると、竹の棒に藤椅子をくくりつけた神輿のような籠に乗って山を登ってきた様で、移動は大変だったと想像される。その籠を担いでいる男たちのハッピーには「苦楽園温泉」と記されている。

(* 4) 「甲陽園目神山町」



西宮には「園」のつく町名が7つあるが、いずれも住宅地や遊園地として開発されたものである。

「甲陽園」は、大正年間に甲陽土地(株)によって開発された遊園地であるが、第二次大戦前に寂れてしまった。

目神山町は、1966年に組合方式の土地区画整理事業として開発分譲が開始された約500戸の住宅地である。換地処分は1996年、組合解散は1998年の40年に亘る開発事業であったが、地形に沿った道路が斜面を縫うように巡らされ、自然の地形が多く残された。そして、平成12年には「まちづくり協議会」が設立され、都市計画法による「地区計画」などによって環境保全の取り組みを行っている。

「目神山」の由来は昔の字名であるが、西宮市によると、甲山の「神」に対して、この土地は小さな神との意味で「め神」と言われたとの説がある。

(* 5) ウワミズザクラとリョウブ



北山貯水池西南端から北山公園へ向かう登山道の入り口付近に、小さな白い花の房(花序)をつけた樹木がある。名前を「ウワミズザクラ」というが、過日お花見を楽しんだ桜とは違って、花序が試験管やコップを洗うブラシの様な形をしており、4~5月の満開時には全体が真っ白に見える。

ウワミズザクラの名前は、古代の占い道具として上面に溝を掘ったためと言われているが、実際には鹿の肩甲骨やウミガメの甲羅の裏側に溝を彫り、火で加熱して、ひび割れた場所で吉凶を占うなかで、堅くて火力の強いウワミズザクラの木が用いられたためである。

ウワミズザクラの隣に並んで、リョウブ(令法)という木がある。名前の由来は、その葉を保存食として作付け、貯蔵するよにとの法令があったためである。試みに、若葉をリョウブ飯にして食べてみると、クセのない山菜の味わいだった。

(* 6) ザイフリボク(シデザクラ)



「ザイフリボク(采振り木)」の名は、白く細長い花弁をつけた花が戦いで指揮を執る采配に似ていることに由来している。

別名の「シデザクラ」は、玉串につける四手(しで)に見立てた名前である。花弁が細長く、ユニークなデザインの花であるが、今回の観察会の時期に満開を迎えた。

(* 7) 「大阪城石垣石 丁場跡」



甲山周辺には大きな岩石がたくさんあり、ミシン目のように四角い穴が並んでいるものがある。これは、大阪の陣によって徹底的に破壊された大阪城を徳川時代に再築する時に切り出した石垣石の残石である。

大阪城再築の総普請奉行に抜擢された摂津尼崎藩主の戸田氏鉄は、領地の武庫郡以下5郡の中にあつた東六甲地域の著名な花崗岩を石材として採集することにした。

岩石の採掘と運送は西国の外様大名が担当したが、当地域を受け持ったのは佐賀藩主鍋島勝茂である。同藩からは、二百名の奉行等が下関から船で広田山(甲山)へと至った。そして、長さ3間の角石をはじめ多くの石を200人もの人力で浜辺に下ろし、石船にて大阪まで運送した。

大阪城の全城域には、100万個にも達する花崗岩の巨石(5~20トン級)を積み上げた石垣があるため、参加した大名家による石の切り出し・運搬・積上げの労力には想像を絶するものがあつた。

再築工事は、元和6年(1620)から始められ、南外堀の修復工事を終えた寛永7年(1630)までに至る3期11年の歳月をもって完成した。そして、あらかじめ取り置いていた多くの巨石が使われずに当地をはじめ小豆島などの瀬戸内海の島々に残っている。